

D-3 小児期の肥満に関する研究(第4報)

別府大^變本莊延子

目的 最近肥満に対する関心が深まり、数多くの研究が発表されている。しかし、小児期とくに乳幼児期を対象とした研究はあまり多くない。そこで演者は、肥満の適切な予防あるいは治療法をみいだすため、まず大分県を中心とした乳幼児期の肥満に関する研究を数年前から開始し、その結果の一部は本学会東京大会、大阪大会、九州支部大会(別府市)等で発表した。本報もその一環をなすもので、大分県大分保健所管内の3才児について調査、検討した結果を報告する。

方法 調査対象となったのは、旧大分市、大南町、庄内町で昭和37年~45年の9年間に3才児検診を受診した幼児やく6,000名である。これらの幼児につき、中村仁吉氏の区分法に準じ、Kamp指数20以上のものをふとりすぎた児として選び出し、その発生過程、頻度、原因等を詳細に調査する。

結果 その結果、ふとりすぎた児は各年次男女児ともにはなほ僅少で、検討するにはじゅうぶんな資料となしえなかつた。そこで、全対象児の各年次別、性別のKamp指数による分布状態と、体重および身長を経年次的な変化をもとめ、これらの間の検討を、詳細な統計学的処理によって行なった。旧大分市は都市型、大南町は農山村型を示し、いずれも次第にKamp指数増加の傾向をほつきり示した。庄内町は特異な型で、農山村でありながら、都市的傾向を示したのは、保健所指導のゆきとどいた結果だと思われる。